



D区 2号横穴墓ベルト (1)



2号横穴墓ベルト (2)



2号横穴墓ベルト断面



2号横穴墓閉塞石検出状況 (1)



2号横穴墓閉塞石検出状況 (2)



2号横穴墓閉塞石検出状況 (3)



閉塞石下部の石 (1)



閉塞石下部の石 (2)



2号横穴墓閉塞石検出状況 (4)



河原石検出状況 (1)



玄室内検出時の状況 (1)



河原石検出状況 (2)



玄室内検出時の状況 (2)



河原石検出状況 (3)



玄室内検出時の状況 (3)



玄室内検出時の状況 (4)



玄室内検出時の状況（5）



玄室内礫床検出状況（1）



玄室内礫床検出状況（2）



玄室内完掘状況



玄室内の状況



玄室内遺物出土状況（1）



玄室内遺物出土状況（2）

図版19



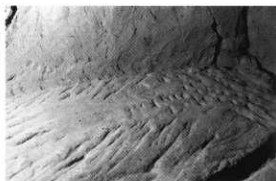
2号横穴墓正面



玄室内天井



玄室内（礫除去後）の状況（1）



床面に残る工具痕



壁面に残る岩



玄室内（礫除去後）の状況（2）



E区調査前の状況〈東から〉



E・F区完掘状況〈北から〉

図版20



E区 遺物出土状況



近世墓1 完掘状況



F区 近世墓1 調査前の状況



近世墓2 検出状況



近世墓3～5 検出状況

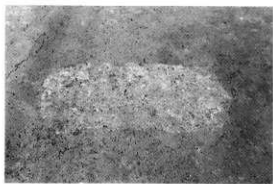


F区 祭祀状遺構完掘状況

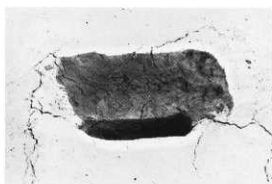


F区 祭祀状遺構土師器出土状況

图版21



F区 1号土坑检出状况



1号土坑完掘状况



F区 2号土坑检出状况



2号土坑完掘状况



F区 3号土坑检出状况



3号土坑完掘状况



F区 4号土坑检出状况



4号土坑完掘状况

図版22



F区 5号土坑検出状況



5号土坑完掘状況



F区 古墳時代壺出土状況



北側斜面の防空壕



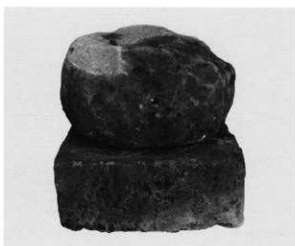
1



2



3



4



5



6

A区石塔群（組み合わせ）①



7



9



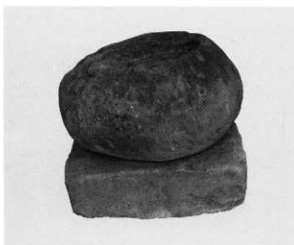
10



11



12



14

A区石塔群（組み合わせ）②



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



14



15



16



17

A区石塔群(空風輪)③



18



19



20



21



22



23



24



25



27



28



30



31



32



33



34



35

A区石塔群（空風輪）④

図版27



36



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51

A区及びB区・F区石塔群（空風輪）⑤



1



2



3



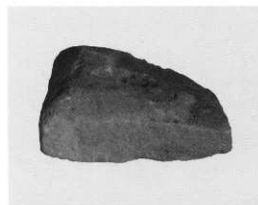
4



5



6



7



8

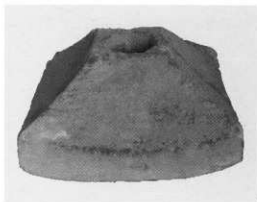
A区石塔群（火輪）⑥



9



10



11



12



13



14



15



16

A区石塔群（火輪）⑦



17



18



19



20



21



22



23



24

A区石塔群（火輪）⑧



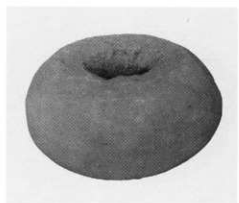
25



26



1



2



3



4



5

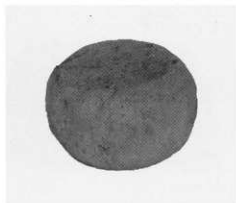


6

A·B区石塔群（火輪·水輪）⑨



7



8



9



10



11



12



13



14

A区石塔群（水輪）^⑩



15



16



17



1



2



3



4



5

A区石塔群（水輪・地輪）⑪

图版34



6



7



8



9



10



11



12



13

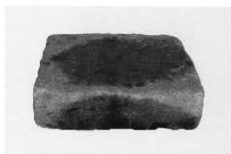
A区石塔群（地輪）⑫



14



15



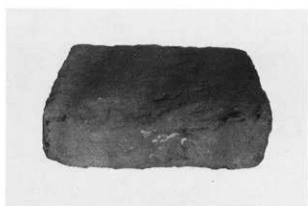
16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



31



32



33



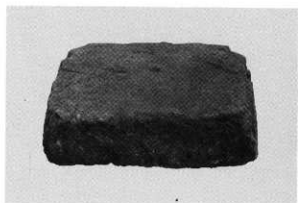
34



35



37



38



39



41



1



2



3



4



5



6



7



8

A区石塔群（石製藏骨器及び板碑）¹⁶



9



10



11



12



13



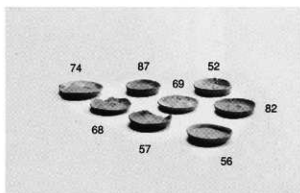
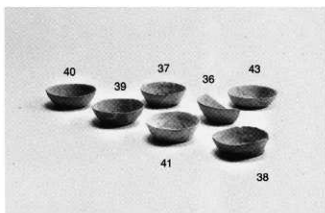
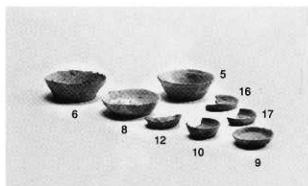
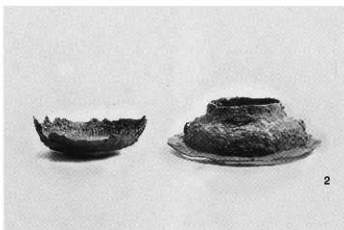
14



15

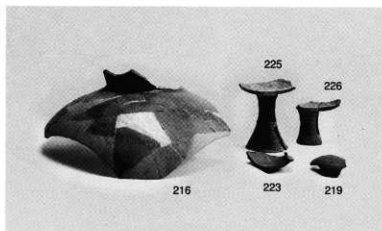
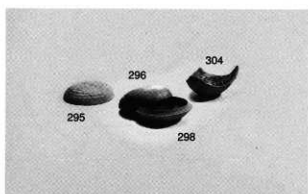
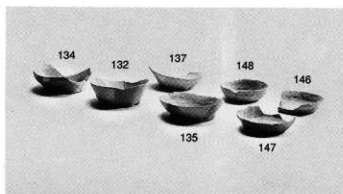
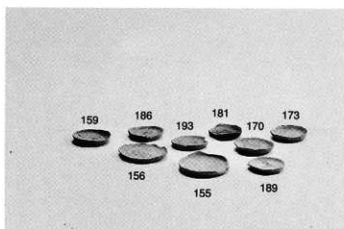
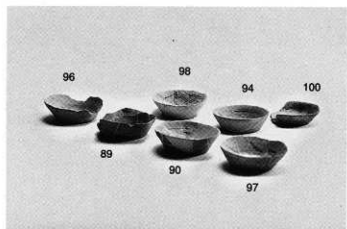
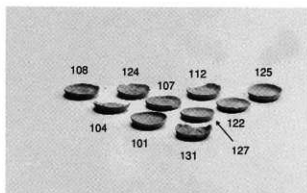
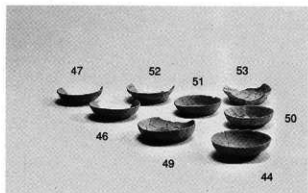
A区石塔群 (板碑) ⑰

図版40

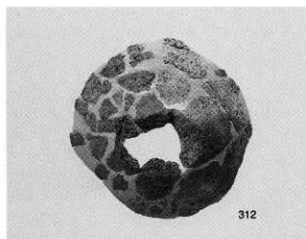
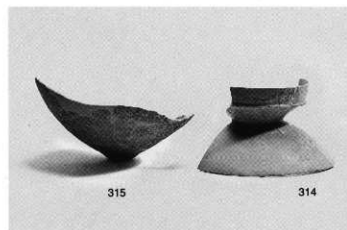
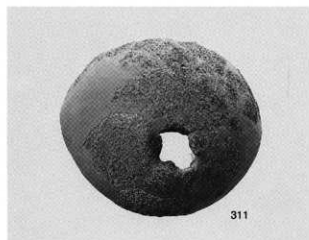
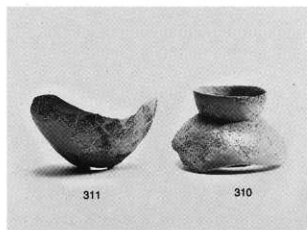
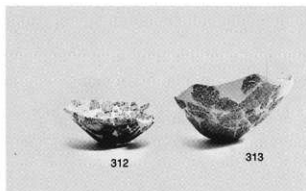
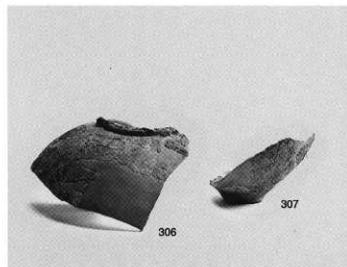


A・B区出土遺物

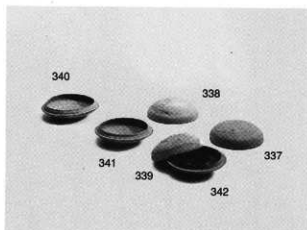
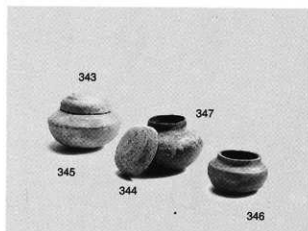
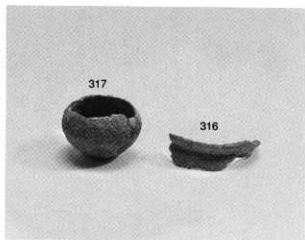
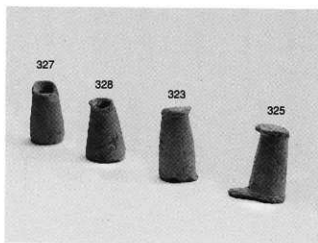
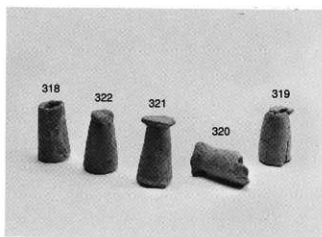
图版41



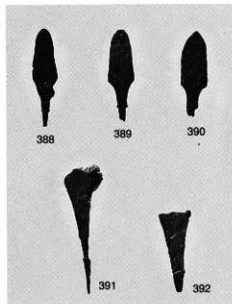
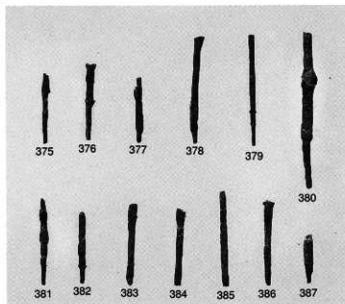
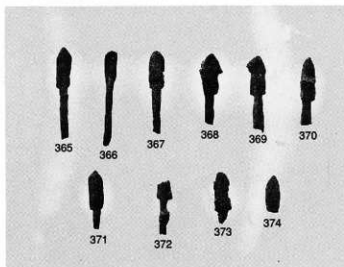
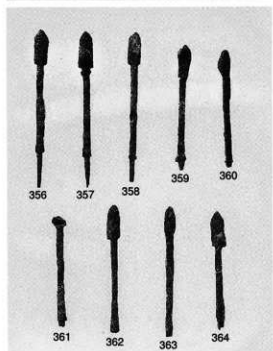
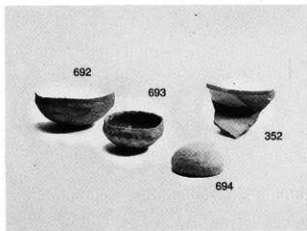
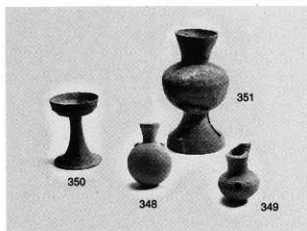
B·C区出土遺物



図版43

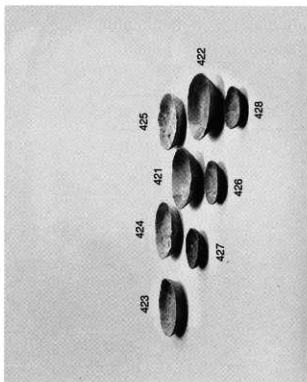
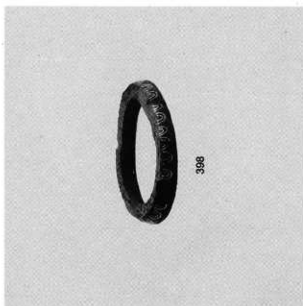
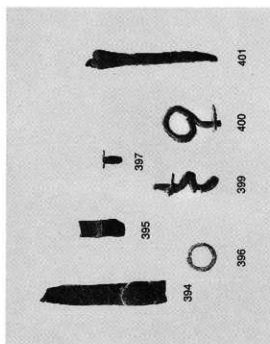
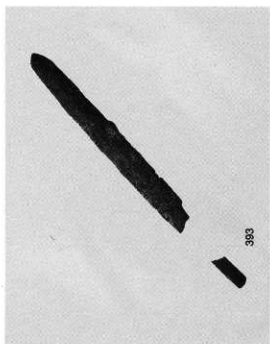


D区出土遺物②

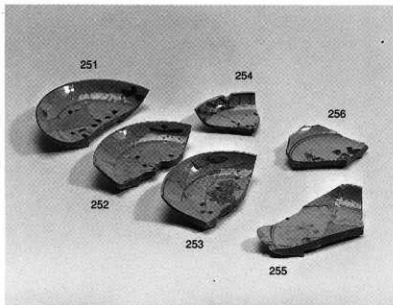
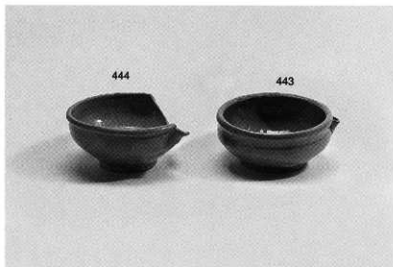
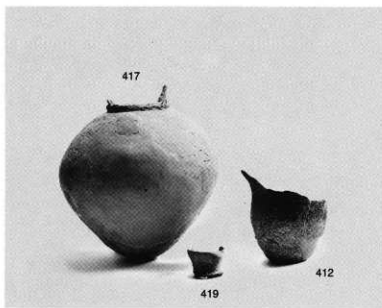


D区出土遗物③

图版45



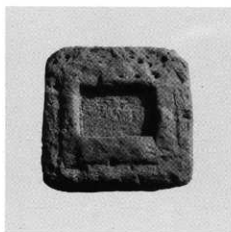
D区出土遗物、F区出土遗物



C区、E F区出土遗物



1-1



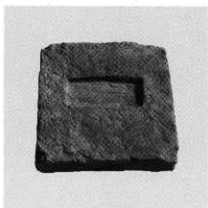
1-2



4



2-1



2-2



3



5-1

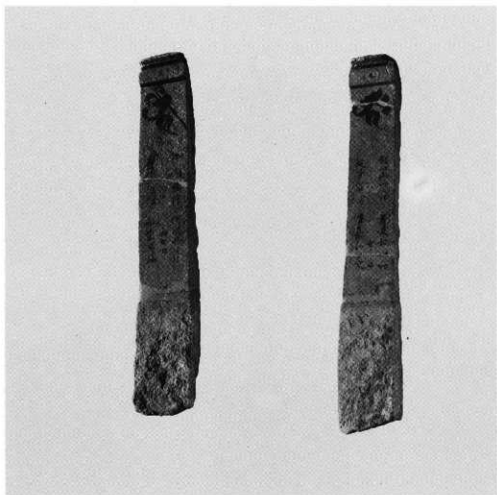


5-2



6

E·F区近世墓



A区復元した板碑

付論① 蔵骨器内の骨の分析結果

石塔群から出土した蔵骨器（古瀬戸の瓶子）中の骨の分析を鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座の助手峰和治氏と同竹中正巳氏に依頼した。その分析結果を掲載する。

宮崎市迫内遺跡出土の骨蔵器内焼骨について

峰 和治・竹中正巳

（鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座）

1. はじめに

東九州自動車道建設に伴う平成10年度の発掘調査で、宮崎市富吉地区の迫内遺跡から古瀬戸の瓶子1点が出土した。その内部に焼骨片が納められており、宮崎県埋蔵文化財センターの依頼により骨の鑑定を行ったので、以下に所見の概要を述べる。この骨蔵器は、迫内遺跡A区で見つかった石塔群（五輪塔と板碑）のうち、大型地輪の下から完形（器高27.9cm）で出土している。古瀬戸は13世紀後半のもので、この石塔群を営んだ武士団の有力者の遺骨とみられるという〔平成12年10月段階での調査担当者のご教示による〕。

2. 焼骨の重量と部位

焼骨整理の手始めとして、骨蔵器の内容を2mmメッシュの篩でふるった。篩の目を通した分は288gであったが、この中には微細骨片や骨粉、灰、砂などが含まれる。通過しなかった分から軽石や植物片を除いた重量は493gであった。正確な骨の分量を計測するのは困難であり、この493gを今回の焼骨重量とする。

小破片が大半を占めるため、部位の同定ができたものはごく少量であるが、重複部分はなく、1個体の人骨とみなされた。頭蓋では後頭骨、側頭骨、前頭骨および下顎骨の特徴的な形態を示す部位についてだけ、左右側が確認された。そのほか、頭蓋冠の内板と外板が分離した破片が多数ある。歯はすべてエナメル質が剥離しており、歯根象牙質を主体とした破片20点ほどを分別したにとどまる。頭蓋とみなした骨片の総量は61gで、全体の約1/8である。体肢骨では橈骨、中手骨、手の指骨（基節骨と末節骨）、寛骨、大腿骨、脛骨などの破片について骨種の判定ができた。しかし、左右の鑑別や骨体のどの位置であるかといった点にまで及んだ破片はほとんどない。

これまで宮崎・鹿児島両県から出土している焼骨例との比較を表49に示す。1個体分としては奄美大島笠利町の宇宿貝塚例が1380gと最重量であり、ほかに1000gを超える焼骨が肝属郡吾平町の川北古石塔群や都城市横尾原遺跡から検出されている（峰他、1997）。今回の迫内例はそれらの半分以下の量である。同定部位はほぼ全身に及んでいるが、不足部分が多すぎる。体格の違いを考慮しても、全身の焼骨が納められていたとは考えにくい。容器の中からごく少量しか焼骨が見つからない事例は過去にも報告されている。このように納骨量が少ない場合、いくつかの可能性が考えられる。①残りは他所に分骨した、②火葬の現場に意図的に相当量を残した、③改葬や供養を契機とした集骨や散骨が行われた、④骨蔵器の大きさや形状による都合、⑤火葬場所での拾骨を丹念に行わなかった、⑥後世の容器破損や流出による焼骨の四散、などである。迫内例では、全身の1/2～

1/3の骨量が含まれているとみられるが、上記のどの可能性も否定はできない。いくつかの要因が組み合わさっていることもあろう。ここで、破片の大きさに注目してみると、最も長いのは脛骨体片の58mmであるが、幅に関しては頭頂骨片の23mmが最も大きい。これは口の内径(25~27mm)が狭い瓶子に入れようとして、砕いて細かくする操作が行われた可能性を示している。しかしこれも、納骨量の少なさの直接的な説明とはならない。

3. 焼骨の性状

一般に火を受けた骨は熱によって変色、収縮、変形、亀裂、細片化などの変化を生じる。追内例はほとんど細片化しているが、熱による以外に、上記のような容器の制約によって人為的破砕が加えられた可能性がある。焼骨特有の鱗状亀裂は、大腿骨や脛骨の骨体片に見られるだけで比較的小さい。緻密質の薄い骨片には、顕著な歪みが見られる。

骨表面の色調では暗灰色が大部分を占め、次いで白色が多い。茶褐色や黒色といった不完全燃焼を示す色や、生焼けのベージュ色の破片はごく少ない。歯のエナメル質も完全に剝離しており、全体的にはよく焼けていると言えるであろう。

4. 性・年齢

性別判定の決め手となる部位は特に残っていないが、頭蓋冠や大腿骨体・脛骨体の緻密質の厚みは男性的な印象が強い。矢状縫合の内板癒合を示す破片が2個遺存していること、歯根片はすべて永久歯で、根管や根尖孔が狭いこと、齶蝕の進行で残根状態となった下顎第2(もしくは第3)大臼歯があることなどから、年齢は熟年(40歳代以降)と推定した。

5. まとめ

追内遺跡出土の骨蔵器内焼骨は熟年男性のもので推定された。重量は493gと少なめで、全身の骨が納められたとは考えにくい。口の狭い瓶子に入れるため、人為的破砕が行われた可能性もある。骨は比較的よく焼成されていた。

これまで、骨蔵器や埋納遺構に関する研究は少なからず行われてきたが、その内容物である焼骨についてはほとんど関心が払われてこなかった。火葬骨は元の形態をほとんど保っていない場合が多く、形質人類学的には興味を引きにくい存在であったと言える。しかし近年、火葬に関する有益な情報を引き出せる資料として、その価値が見直されつつある。性・年齢・体格といった遺骨の個人のデータだけでなく、火葬の方法や納める骨の量、納骨に当たっての作法や順序など、当時の葬法の一端を知る材料ともなりうる。新たに骨蔵器が発見された場合、こうした視点をもって、記録を取りながら器内から焼骨を取り出すことが肝要と考える。

[文献]

峰 和治・小片 彦彦：笠利町字宿貝塚出土の蔵骨器内焼骨について、笠利町文化財報告（鹿児島県笠利町教育委員会編）23：15-30(1997)

第49表 宮崎県および鹿児島県出土の焼骨

遺跡名	所在地	容器・遺構	時代	性・年齢	重量 (g)	報告者 (年)
迫内遺跡	宮崎市	古瀬戸瓶子	13世紀後半	男・熟年	493	本報告
横尾原1号	都城市	須恵器壺	奈良	男・熟年	1110	峰他(1992)
横尾原2号	都城市	須恵器壺	奈良	?・成人	630	峰他(1992)
黒田B遺跡	曾於郡財部町	土師器甕	奈良	?・?	570	松下(1984)
小平遺跡	曾於郡末吉町	須恵器壺	平安	?・?	110	松下(1984)
川北古石塔群	肝属郡吾平町	成川式壺	鎌倉	男・熟年	1150	松下(1984)
越ノ巣火葬墓	川内市	須恵器壺	奈良	男・成人	870	小片(1988)
栗野第1例	始良郡栗野町	須恵器壺	平安?	?・成人	290	未報告
栗野第2例	始良郡栗野町	須恵器壺	平安?	?・成人	780	未報告
谷山弓場城跡	鹿児島市	須恵器壺	平安～鎌倉	?・?	25	小片他(1992)
小中原遺跡	日置郡金峰町	土壙	平安	?・?	250	未報告
宇宿貝塚	大島郡笠利町	陶質土器	10世紀	男・壮～熟年	1380	峰他(1997)
広田遺跡	熊毛郡南種子町	土壙	弥生時代後	多数個体	不詳	国分・盛園 (1958)
喜念クバン シャ岩陰墓	大島郡伊仙町 (徳之島)	岩陰	不詳	成人4～5個	計480	小片他(1988)

註：各引用資料は出典は峰他(1997)参照のこと。

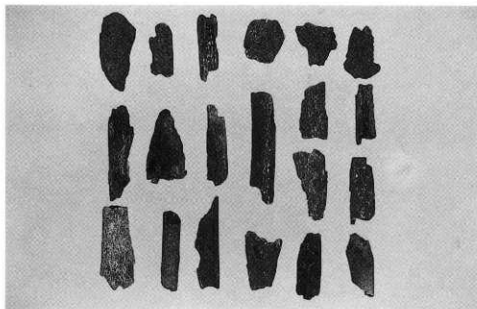
図版49 迫内遺跡焼骨写真1



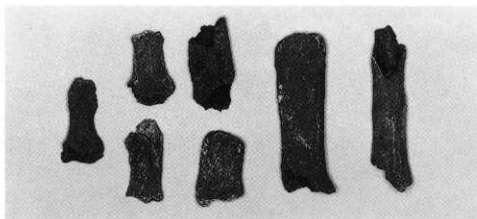
骨蔵器（古瀬戸瓶子）内焼骨の全体像



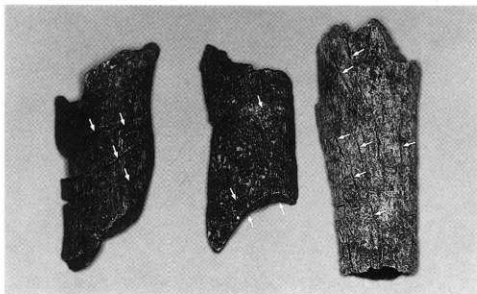
体肢骨片



主要体肢骨片



手の骨



亀裂(矢印)のある体肢骨片